特集論文（『社会分析』34 号，2007，75～91）

# 現代日本における若者イメージ

## ―豊かな社会における若年世代認識の変化について―

城戸 秀之

### 1．若年世代はいかに「語られる」のか

現代社会において「若者」はつねに社会的関心の対象となってきた。21 世紀を迎えた現在、マスコミや言論界をはじめ政府の政策においてもこれまで以上に重要なテーマとなっている。ただし、それは「ひきこもり」、「少年犯罪」、「フリーター」、「ニート」など現代社会の負の側面を示すものとして語られることが多い。しかし、20 年以前に「若者」は豊かな現代社会の先端として位置づけられていたのである。この対極的な評価の変化において、変化したのは、「若者」なのだろうか、それとも「社会」なのだろうか。

われわれはそれぞれの時代に自明としての現代社会像を共有し、また社会内部の様々な存在に対しても自明な認識像を前提に語ってきた。それは実態としての社会を反映するものとみなすが、しかし、前述の変化を前にすると次のことを問わなくてはならない。われわれが自明としている同時代の若年世代像は、果たして正確なものなのだろうか。また、われわれは若年世代について語ることで、いかなる社会像を自明なものとして語っているのであろうか。

若年世代の実態については厳密な実証研究によって検証されるべきだが、本稿ではそれに対応する若年世代に関する言説について知識社会学的観点から考察する。その目的はあくまでその認識を通しての「大人」としてのわれわれの現代社会についての認識枠組みをさぐることにある。小谷敏が指摘するように、「若者」に関する言説はつねに「大人」の側からの認識であり、その価値観にもとづく評

価といえる（小谷, 1993a:i-ii)。この点で「若者」を語ることは、かれらを評価する社会を語ることにもつながるのである。

次章以下では、70年代以降の「若者論」の変遷を通して若者イメージの変化の一端をたどり、特に1990年代以降の若者をめぐる言説のあり方に同時代的な社会認識の問題を考えたい。そこには戦後日本社会における産業化と都市化の進展に伴う生活様式の変化を背景とした、「豊かな社会」としての日本における社会観・人間観の変化を見ることができる。そして消費化と情報化の深化に焦点を合わせて、それに伴う社会環境の操作化の進展と、その帰結としての社会的存在としての若年者のあり方の関係について考えたい。

本稿は、筆者の視界という限界のもとで、上記の課題に取り組むことを試みたものである。ここでは学問的言説ではなく、より一般的な言説として語られた「若者論」に多くの材料を取っていることを断っておく。本稿では年齢層としての若年層を指す場合は「若年世代」とし、彼らに対する一定の評価にもとづく言説については「若者」とする。なお、年齢のとしては個々の言説文脈に応じて、15歳前後から30歳代までが含まれる。そして、そこから抽出できる若年世代像は「若者イメージ」とし、これに対する同時代の社会に対する認識も「社会イメージ」として記述する。この点で論理的厳密さには欠けるが、それは今後の課題として、若年層に対する言説の変化の概要を整理してみたい。

## 2.「大人」との不連続性と異質性——70年代おける若者イメージの転換

### 2．1　モラトリアムと「青年論」

本稿で取り上げる「若者」とは、社会の構成員としての年長世代（若者に対する「大人」)の視点によって同時代的経験を背景に若年世代の特徴として評価され、抽出された一種の仮想的存在である。この意味での「若者論」は主に1980年代に展開されるが、まずその前史である1970年代の「青年論」について見る必要がある。以下、小谷らの議論にもとづいて、青年と異なる若者イメージの形成についてまとめてみたい。

戦後日本で若年世代が議論の対象となったのはまず、高度経済成長に伴う青年期の大衆化と60年代後半以降激化する学生運動などの「青年の異議申し立て」が

主題としてであった（岩佐, 1993; 8）。そこでは後年の小此木の議論と同様にエリクソンのライフサイクルという発展段階説に立脚して「モラトリアム」の概念を用いて前述の状況がとらえられていた[1]。本来のモラトリアムは青年期に社会的役割を受け入れて社会内存在として自己を位置づけるための義務や責任の猶予期間であり、自己の社会的な位置づけが得られない場合を病理的状態としての「アイデンティティ拡散」とみなした。この限りでの「青年」についての議論には社会的な役割を受け入れた「大人」との連続性が前提にあった。それにもとづいての若年世代の現状分析なのであり、いまだ若年世代特有の内的論理や動態を志向するものではなかった。

## ２．２　モラトリアム人間とミリタントなやさしさ

この「青年論」は70年代後半には若年世代に年長世代との不連続性をみるようになり、さらに「社会的性格」として論じられるようになる（岩佐, 1993:24）。その嚆矢となったのが小此木啓吾の「モラトリアム人間」である（小此木, 1978=1981）[2]。小此木は前述のアイデンティティ拡散が現代社会的は青年に限らず社会に一般化し、モラトリアムが社会的性格となったことを指摘する。それは産業社会の進展とともに高学歴化や消費文化の展開などにより青年期の位置づけが変化し、その地位が相対的に向上した結果として将来大人になることを前提とした「古典的モラトリアム心理」が変化したのである。この「新しいモラトリアム心理」は全能感、遊び感覚、局外者意識、無意欲・しらけなどを特徴とするものであり、この青年期のモラトリアムの変化が、経済的豊かさ、都市化によるアノミー状況、マスコミュニケーションによるその増幅などを要因として社会全体に一般化したのである。これを小此木は70年代の無党派層の増大や競争社会への批判など政治・社会状況をふまえて、社会的性格として論じているのである。

以下の２点に注意する必要がある。１つは社会全体に一般化するとはいえ、「モラトリアム」という用語が示すように、若年世代の状況に社会的変化の特徴をみる視点であり、80 年代の若者論につながる視点である。もう一つは、「モラトリアム人間」に違和感を持ちつつも、産業社会における管理と競争の強化に対するひとつの選択肢と見なす点である（小此木, 1978=1981:75-80）。さらに、小此木は「分裂的性格」の心理的傾向が社会的に一般化した「シゾイド人間」（小此木,

1980）と、自己中心的な社会心理状況の一般化である「自己愛人間」（小此木, 1981）を同時代的な社会的性格として論じる。そこでも管理社会や消費社会の進展に伴うアイデンティティ拡散状態は現代人にとって環境適応的に機能するものとして述べられている。小此木は、それまで病理と見なされた社会心理状況が、新しい適応様式となるという観点から、社会の変化と同時代の社会心理を描くのである（小谷, 1993b:61）。

これに対して、同じく「アイデンティティ拡散」をキーワードしながらも、そこに社会変革の可能性をみるのが、栗原彬の「やさしさ」をめぐる議論である（栗原, 1981）。栗原は産業社会における競争原理の一元化にともなって青年は自己形成のための共同性を失い、アイデンティティ拡散が恒常化することを指摘する。小此木との相違点は、①あくまで青年における問題ととらえ、他者との連帯を通しての自己の獲得をもとめること、②アイデンティティ拡散に関して、社会に適応しながらも主体的にアイデンティティの未成を選択する「二重意識型」に、社会変革の主体としての期待をかけることである。そこで栗原は変革へ向かう契機としてのミリタントな「やさしさ」を取り上げるが、それは産業社会の競争の中で傷ついた青年が、弱者としての自己に気づき弱産業社会における他の弱者に共感することで、失われた共同性を取り戻そうとする態度なのである（小谷, 1993b:63）。

小此木と栗原の議論は、高度経済成長の終了、公害問題などによる成長主義への批判、学生運動の停滞の一方で、消費的豊かさが実現され「中流社会」という認識が定着した時代を背景にしている。若年世代についての言説として両者をみると、モラトリアム的状況が産業社会において構造的に生み出され、そこへの環境適応の様式として機能する点については同一である。能動性と変革性の有無は、論者の同時代社会に対する評価の相違だけでなく、それぞれの議論の焦点が小此木では社会心理にあるのに対して、栗原では社会構造にあることによるものと考えられる。ここでは心理面へのアプローチでは現在の環境を前提にそこへの適応が主題になりやすいことを確認しておきたい。

### ２．３　「青年」から「若者」へ

60 年代についてはふれなかったが、高度成長期においては急速な産業化の進展

にともなって伝統的生活様式から都市的生活様式への大規模な転換が生じ現在の消費的な生活様式が形成される（城戸, 1996）。そこにおいては「モーレツ社員」と「消費革命」が併存するように、賃金労働者になることを通しての生産への参加と、耐久消費財の購買者として自己の生活を設計することによる消費への参加が経済成長を背景として連続しており、その経済的「豊かさ」における「大人」としての自立という枠組みの中に若年者は置かれていたと考えられる。

しかし、70年代においては産業社会の展開において成人と未成人の境界が曖昧になることで「自立」の意味が変化して、エリクソン的な発達段階論が分析図式としての意味を失い、その結果「青年論」から「若者論」へと移行してゆくのである（新井ほか, 1993:204-207）。そして、80年代に入り産業社会よりも消費社会としての性格が強くなると、若年世代は消費文化、メディア文化の主体として社会の中に取り込まれてゆく。次章ではこのように消費動向に注目され、マーケットの「トレンド」として読み込まれる「若者」をめぐる議論についてみてみよう。

## 3　自己認識のプラグマティズム——80年代・90年代の操作的人間像

### 3．1　消費社会の「若者」

1980年代は1960年代に次ぐ好景気の時期であり、消費に関心が集まる中で様々な場面で若年世代のあり方が語られた。その代表が「新人類」であろう。多くの文脈で語られ、論者によって含意や力点に違いがみられるが、新メディア性、高度の消費性向がモラトリアム人間に加わったものと見ることができる（新井ほか, 1993:212）。前章でもふれたように、80年代の若者論は発達段階論から解放され、消費社会化、情報化の中で変化する社会を体現する存在として若年世代を位置づけるのである(3)。

当時のマーケターによる消費社会論は「先端」として読み込んだ消費動向を「トレンド」として一般化し、日本社会の成熟を語る未来社会論的言説であった（城戸, 1996:121-123）。昭和61年版と昭和63年版『国民生活白書』で指摘されたように、当時の消費動向では消費者ごとの多様性が拡大し、マーケットから見えにくいものになっていた。それを個々人の差異的消費よる自己表現の追求の結果とみなし、記号概念を援用した消費記号論が展開される（城戸, 1993）。「分衆」（博

報堂生活研究所, 1985）と「少衆」（藤岡, 1984）はその代表であり、1960年代の消費状況と対比することで消費を中核とする人間と社会をモデル化し、当時の社会を肯定するものであった[4]。これらの変化を体現するものとして、小説や雑誌に範をとる「クリスタル族」（田中, 1981）や「Hanako族」のように消費性向の高い「若者」が先端として取り上げられたのである[5]。しかし、このような言説は当時の若年世代の一部を反映したものに過ぎず、実は消費社会という社会的イメージとの合致する部分が若者イメージとして強調されているのである（新井・岩佐・守弘, 1993）。

これは「消費社会」という全体に「消費者」という個を位置づけることで成り立つ議論だが、その一方で80年代終わりから90年代の半ばにかけて、消費主体としての個の環境適応に焦点を合わせた議論がなされている。以下、その若者イメージについて紹介してみよう。

### ３．２　プラグマティクな自己実現

1980年代の消費的パーソナリティの特徴を示すものが、大平健のいう「＜モノ語り＞のひとびと」である（大平, 1990）。それは、自己と他者とを所有する財のセットとして認識し、そのコントロールを通じて社会的環境への適応をおこなう行動様式なのである。重要なのは、このモノによる表現が「自信」「やる気」などのあいまいな心的な事項をコントロール可能にするとともに、それによって対人関係における葛藤の軽減をもたらしている点である。大平はこれらの若年世代を中心とする事例を消費社会への過剰適応としながらも、小此木と同様に適応すべき社会について批判することはない。モノの獲得によってプラグマティックに豊かさをもとめる戦後の日本社会のあり方と、日本的価値である「和」が示す対人関係の調和を取り上げ、＜モノ語り＞をそこに位置づけることで理解しようとするのである（大平, 1990:240-243）。

大平はさらに観察をすすめて「若者」における新しい対人的態度について論じている（大平, 1995）。大平は、「団塊世代」と（たぶんその子どもの世代である）「若者」において「やさしさ」の意味が変化したという。旧世代のやさしさはお互いに傷ついていることを前提に相手と一体感をもとうとする治療的やさしさであるが、新世代ではお互いに傷つくことを回避するために距離をとろうとする予

防的態度がやさしさだとしている（大平, 1995:164-166）。ここでも葛藤の回避が対人関係上の大きな問題となる。<モノ語り>が消費を介して積極的に葛藤回避をおこなうのに対して、新しいやさしさは予防という点で消極的であるように見える。しかし、大平は集団への協調という点で年長世代と共通することを指摘する（1995:68-71）。また、「自分探し」に関して、新世代はあいまいな「自分」に対してプラグマティックな方法を選択することも指摘している（大平, 1995:206）。それは戦術の違いなのである。

消費行動に特化した議論として岡田斗司夫の「洗脳社会」がある。岡田は 90 年代に評論活動を通して「オタク」[(6)]を一般的な用語として広めたが、ここでは情報社会において過剰に個々人の嗜好に特化した消費がうみだす社会状況を論じている（岡田, 1995=1998）。岡田のいう「洗脳社会」とはマルチメディアの普及によって、それまでマスメディアに限られていた、人々の価値観を一定方向に向けようとする行為が一般個人にも可能になった状況を指している。そこでは消費を通して供給される複数の価値観を個々人が選択し、それらを編集することで自分の価値観を作り出すのである。このとき個人は矛盾した複数の価値観をもちつつそれを使い分け、それをもとに複数の集団に所属するものとして描かれる。その場合、個人は自身の本質ではなく、価値観としての趣味のステロタイプにおいて判断される（岡田, 1995=1998:202）。個人はこのような価値観の総体として自己を認識するとともに、特定の関係に束縛されない自由を得るのである[(7)]。

岡田は 80 年代の消費記号論が示した非経済的付加価値による商品選択の重要性とマーケットの不透明性を若年世代の消費動向をもとに強調するが、その理由として既存の価値観、「経済」や「科学」への若者の不信をあげている（岡田, 1995=1998:52-53）。それにかわる新しい価値が「自分の気持ち」であり、それを実現するための消費なのである。

### ３．３　異質性と先端性としての「若者」

前節では消費社会における環境適応のあり方から抽出された若者イメージを見てきた。そこでは消費記号論と同様に、消費・情報メディアの利用した価値観の選択性の高さ、プラグマティックな自己実現のあり方がその特徴として描かれている。それは自己認識のプラグマティズムとも呼べるもので、自己は他者を必要

としない存在として描かれている。しかし、大平と岡田の議論で重要なのは、消費による自己表現の一方での自己存在の不安を指摘している点である。

大平は「葛藤回避」する存在として現代人を描くが、彼らは心的葛藤だけでなく葛藤解決のための責任をも回避している。それは「自分探し」に現れるように、現時点での自己がつねに未確定の存在として意識されていることによるのでる（大平, 1995:203-206）。また、岡田は「本当の気持ち」を自由な関係からくる不安であるとし、この不安定な自己のために現代人は価値観を操作して、快適な人間関係を維持しようとするとみている（岡田, 1995=1998:230-238）。

この状況について大平は豊かさや、やさしさを志向する現代人の価値観、岡田はマルチメデイアの発達と合理的価値観からの転換を理由としてあげている。しかし、重要なのは消費化・情報化の進展にともなう社会構造の変化である。それにより対人関係が希薄化する一方で、われわれには適応すべき環境として消費と情報の空間が与えられているのである[8]。

1980 年代から 90 年代半ばにかけての若年世代のイメージは、「消費社会」という上位の社会的イメージに従属するサブイメージとして機能している。時代の「先端」として、年長世代とは異質ではあっても、新しい「豊かさ」を生みだす社会の変化の体現者と見なされることで社会に整合するのである。ただその場合の社会は発達段階論にあるような社会的な存在ではなく、また「若者」も社会性の低い存在として描かれることになる。それは小此木が示した現代人の特性を消費化と情報化の進展に合わせて同時代的に記述し直したものであるが、ここでは自己存在の選択可能性の一方での、自己存在の不安定を指摘している点に注目しなくてはならない。次章では 1990 年代後半以降の若者イメージについてふれるが、「構造改革」という全体的状況の変化ともに大きな転換が生じるのである。

## 4　「自立」と若者の対立と社会の二極化——90 年代以降の若者イメージ

### 4．1　社会的ビジョンの転換と「若者」批判

1990 年代は政策におけるビジョンが大きく転換した 10 年間である。その前半では好景気の終了後の景気後退のなかで、それまでの経済中心社会と消費中心の生活を反省する政策ビジョンである「生活大国」が社会的価値への回帰を打ち出

した（経済企画庁, 1992; 城戸, 1995）。そこでは国民だけでなく企業もふくめて市民としての社会に対する自己責任を中核とする、人権や環境に配慮した新たな経済社会への転換を踏ったものであった。

しかし、景気回復が遅れる中で、1996 年の行革審の答申をうけ、『平成８年版経済白書』で提唱されて以降、「構造改革」が社会変革のビジョンとなる。それは規制緩和と民営化に代表されるように、公共セクタを始めとして社会のあらゆる場面で市場原理に基づく競争を導入し、経済成長可能な経済社会への転換をめざすものである。ここでも「自己責任」が問われるが、それは社会的領域から撤退し、競争における自己の行為の結果にたいする経済的な場面に限定されることになる(9)。このような経済成長主義への回帰とともに、若年世代への「自立」の要求と、それに応えない「若者」への批判が見られるようになる。

そこでは年長世代の青年期とは異質な「若者」が批判の対象になる。いくつか挙げてみよう。1997 年の神戸小学生連続殺傷事件に代表されるように少年犯罪の凶悪化と低年齢化がマスコミなどを通じて社会の共通理解となっていく。また、携帯電話の普及にともないその使用をめぐる問題が取り上げられる（正高, 2003）(10)。この他、精神医学や心理学の論者が、若年世代にみられる他者依存性（矢幡, 2004）や根拠のない他者への優越感（速水, 2006）などを問題として論じている(11)。この心理学的アプローチは社会的な状況や構造を論じないことが特徴なのである（小沢・中島, 2004）。こうして「問題」は若年世代に還元され、ふたたび若者の「病理」が語られる。

以上のような言説は若年世代の部分的イメージを取り上げるものだが、より全面的な若年世代の問題として語られるのが「フリーター」と「ニート」である(12)。それは若年世代における非正規雇用と無業者の増大という労働経済の問題であるが、それと同時に正規雇用にもとづく標準的なライフコースからの逸脱として、生き方そのものの問題として取り上げられるようになる。「フリーター」も当初は『平成 15 年版国民生活白書』がデフレが若年者の雇用に及ぼす悪影響を論じたように社会経済の構造的問題として取り上げられたが、2004 年以降は「ニート」の議論と結びつくなかで、職業選択における意欲や能力の欠如などの若年世代の内的な問題に転化されていく（本田ほか, 2006:53-54）。そして、内田朝雄が指摘するように、マスコミの報道などを通じてもう一つの若年世代の問題とされる「ひ

きこもり」とイメージが重ねられ、現代社会の負のイメージをおわされることになる（本田ほか, 2006:157-162）。

### 4．2　パラサイ・トシングルと下流社会

このような「構造改革」における若年世代の負のイメージの契機となったが、山田昌弘の「パラサイト・シングル」である（山田, 1999）。山田は学卒後も親と同居する子供世代の増大を、戦後の経済成長に伴う親子関係や、雇用状況の変化にともなう自立の困難さという社会的要因を国際比較を交えて考察する一方で、「大人と子供のいいとこ取り」という表現にも見られるように、その居心地良さを指摘する。そして、生活を支える基本コストを親に依存することからくる基礎的消費の需要の減少を景気停滞という経済的問題として投げかけるのである。山田は学卒後の正規雇用によって世帯を構えるという標準的ライフコースと若年世代における現実とのズレを指摘し、雇用する側の問題と家族の側の問題を「対策」として指摘するが、以降の若者論において「パラサイト・シングル」は結果として構造改革における経済の論点と、年長世代と異質な若者という論点とを結びつける役割を果たしたのである。

構造改革の進展によって規制緩和がすすみ一部の企業と業界に経済的富が集中する一方で、行財政改革により社会保障や地方行政の財源の削減がすすめられた。そして戦後自明であった「中流社会」のイメージにかわり、経済的格差にもとづく社会的・文化的格差が拡大し国民が「上」と「下」に二極化し固定化する「格差社会」が語られる様になった。社会における格差については、1980年代においても指摘されていたが[13]、2000年以降、政府の経済政策が格差を肯定するなかで、現実的な問題となってゆく。

格差社会における階層の二極化の問題を若者の問題と関連させたものが三浦展の「下流社会」である（三浦, 2005）。この「下流」は経済的貧困としての「下層」ではなく、一定程度の所得をもとにした消費スタイルとしてのランクを指すのである。それは中程度以下の所得という経済的要因だけによるのでなく、コミュニケーションや社交の能力に加えて、「上流」への上昇志向という意欲の欠如によって生み出されるものとして描かれている。マーケターとしての立場から三浦は消費動向や意識調査をもとにいくつかの行動類型を提示し、特に若年世代の問題と

してこの「下流」を論じるが、そこには年長世代の「いらだち」のような気分を読み取ることができる。他方で三浦は都市化に伴う生活様式の消費化という構造的観点から、郊外型大規模小売店が地方社会におよぼした変容を批判的に論じているが（三浦, 1999; 2004)、「下流」に対してはマーケティング的手法を取るために社会構造の問題ではなく若年世代の問題として語られるのである。

### ４．３　理解不能な「若者」

この章で見た最近の「若者論」は、情報メディアの普及をはじめとして生活環境が大きく変化した世代のもつ異質性と、経済成長を是とする経済社会への適合としての経済的自立の強調を特徴としている。「成長」を価値とする社会イメージは、消費化がすすむ若年世代の生活状況をもはや評価しないのである。興味深いのは、70 年代に年長世代からその異質性を変化の先端として評価された世代が年長になり、若年世代に対してより異質性と問題性を感じているという点である。新井らは 70 年代の「若者論」を年長世代にとって若年世代を理解可能にするためのものだったとしているが（新井ほか, 1993; 205-206)、90 年代以降の言説では「病理」とされるように、若者の「理解不能性」がより強く出るといえる。

また、70 年代後半以降は若年世代の自立を論じる発達段階論からはなれた若者のイメージが語られたが、生産システムへの参加という形で再び「自立」や「大人」であることを論点として若年世代が語られるのである。そこには「構造改革」の名の下で雇用状況の困難さは顧慮されない一方で、「バッシング」と呼べるほどに負の評価が強く現れている。ここにこの時代の社会状況が表われているのであり、この変化の意味について考えなくてはならない。

## ５．現代社会における人間存在とは

### ５．１　若者イメージの変化

本稿で概観してきた 1970 年代以降の若年世代のイメージの変化を整理してみよう。70 年代においては、小此木の「モラトリアム人間」はエリクソン的な発達段階論からの逸脱の恒常化として日本社会の社会心理的特性を描いたが、それは病理的状況の一般化として語られるように、大人への移行を前提とした「青年」

から、大人との異質性を特徴とする「若者」への言説の転換を示すものであった。小此木がモラトリアム人間を条件付きだが肯定的に述べるように、70 年代と 80 年代において「若者」は時代の変化の先端を象徴するものとして評価された。特に 80 年代は好景気を背景に差異化的な消費動向を裏付けとする「消費社会」という社会イメージに関係づけられて個性的消費による自己実現の先端として若者が描かれた。この場合注意しなくてはならないが、80 年代の若者の差異志向という価値観は、単に好景気という経済的な量的要因によりもたらされたものでなく、高度成長期以降の生活様式の都市化に起因する消費化と情報化の深化なのである。

90 年代の景気後退期において、若者イメージと社会イメージとの関係は変化する。90 年代前半はバブル期の反省として「生活大国」や「生活者」が来るべき社会と人間のイメージとして語られたが、若者イメージはこれと直接はリンクしなかった。若者は生活環境において外的には消費・情報のアイテムを駆使する一方で、内的には、特に対人関係において不安定な存在として語られた。しかし、90 年代後半には経済成長への回帰を目指す「構造改革」が社会のビジョンとして打ち出され、様々な場面での制度改変がすすめられる。ここでは「パラサイトシングル」をはじめとして、若者は社会的不安の拡大と景気回復の遅れの「要因」として語られることになる。そこで重要なのは、批判的な若者イメージでは再び「病理」が語られ、労働を通しての「自立」という論理が背後にみられることである。大人の社会で自明な経済的・社会的なビジョンからのズレが感情的な違和感を交えて問題として語られるのである。

ここには「豊かな社会」である現代日本での社会と若年世代の関係が表れている。若年世代は 70 年代以降一貫して社会環境の消費化・情報化の結果として語られ、その評価は「豊かさ」の力点が生産にあるか消費にあるかで変化することがわかる。90 年代までは消費に価値が置かれるため、年長世代との異質性は「豊かさ」の表現と見られていたが、90 年代後半以降は「豊かさ」の前提として生産に価値が置かれ、その論理のもとで若年世代に負の評価が下されるのである。

### ５．２　「アイデンティティ」の変容

このように若年世代は変化において「若者」の特性が理解され、その時代に共有された「大人」の価値観によって評価されてきた。その点で若者を語ることは、

同時代の社会状況を語ることにつながる。1990年代後半以降の若者イメージについては、すでに見たように、近年は経済の観点から再び若年世代の「自立」が論点となっている。以前に1970年代に若年世代の認識が発達段階論からはなれることで「若者論」が成立することをみたが、ならばこの「自立」への回帰は、ふたたび発達段階論への回帰を意味するのであろうか。

これについて重要な材料を提供するのが上野千鶴子による「アイデンティティ」概念に関する議論である（上野, 2005）。上野はフロイト、エリクソン以降の理論史を整理することで現代社会における「アイデンティティ」概念の無効性を指摘するが、その論点は「一貫した実体的存在」としての自己アイデンティティが現代社会の現実を反映していないことにあり、当初は分析ツールであったものが規範的命題へと転化することへの批判をおこなうのである。上野の編著ではこの観点からジェンダーをはじめに多様な分野の論者の論考を集めるが、現代社会における自己認識の現状を理論的に論じるのが浅野智彦の論考である（浅野, 2005）。

浅野は自己物語論の現代社会における限界と課題について論じるが、そこで示されるのは自己物語論が前提とする一冊の書物として統合された自己物語と、多重人格的状況がすすみ複数のユニットの集まりとなった自己アイデンティティとの不一致である。現代ではこのような「小さな物語」が並列する状況が現実であり、このなかでは自己を語ることの意味がさらに重要になるのである（浅野, 2005:92-93）。

また、三浦展も消費と自己認識の関係から、浅野のいう「小さな物語」が蔓延する状況を論じている（三浦, 2005）。60年代の生産と消費という大きな物語が現在は消失し、現代人は消費において個々に自己の小さな物語を作らなくてはならなくなっている。三浦は消費を通して現代人が「自分らしさ」を求めるあり方論じるが、そこで示されるのは消費では（構造的に）統合した自己が得られず、個々の消費における複数の自己の存在に解体した姿である。三浦は前述の若年世代での意欲の欠如を、このような欲求主体しての統合の消失から説明しようとする（三浦, 2005:122）。

このような「一貫する自己」の不在は上野が指摘するように、現代人の集団帰属のあり方の変化にともなうものであり、その限りで逸脱的ではなく適応的な様態ということができる（上野, 2005:35）。このような状況では統合的な自己のみな

らず統合的な他者や社会を見つけることも困難になる。70年代には「大人」と「若者」の間の発達的な関係が崩れることによって発達段階論が効力を失ったが、ここでは「大人」と「若者」の間に発達的な関係を再び措定することが論じられる一方で、発達における自己認識の枠組み自体が揺らいでいる事態が示されているのである。

### 5．3　「若者論」の含意とは

前節で示したように若年世代に「自立」が要求される場合、暗黙の内に発達段階的な統合された自己を前提とすると考えられる。しかし、現実には若年世代をふくめて現代社会の自己存在は複合的で多重的な自己が一般化しているのであり、上野らが指摘するようにこの矛盾について論じられねばならないのである。しかし、「若者」が批判的に語られるように、現在ではこの点は年長世代が自明視する人間観・社会観の陰に隠されて十分に問題視されていないのではないか。また、非統合的自己の一般化は栗原の戦略としてのモラトリアム意識とは異なり、自己とともに、適応すべき社会もまた統合的に認識されないことを意味する。三浦は消費における物語が自己の統合をもたらさない一方で、他のナショナリズムや宗教などの「大きな物語」への親和性が高まることを指摘するが（三浦，2005:114-115）、社会がそれまでのように構造的に把握できない状況での社会認識のあり方こそ考察されなくてはならないのである[14]。

戦後一貫する生活様式の消費化という観点からは、現在の「若者」の状況は社会環境の構造的変化の帰結であり、その限りで適応的と考えられる。若年世代にとって大平や浅野らが記述する状況は「病理」ではなく、年長世代が作り出した日常的現実なのである。しかし、経済成長を是とする「構造改革」という社会的イメージとの不一致のために「若者」が否定的言説において語られるのである。これは世代による社会状況の認識の相違の結果と考えられるが、（筆者も含めて）高度成長期の経験を自明とする世代の側に、若者だけでなく現在の社会状況に対しても自己の社会認識やビジョンとの間に齟齬が生じているのではないだろうか。ここ数年の高度成長期を中心とする「昭和」の回顧と再評価の意味はこの世代的な観点からも考える必要があろう。

これは「若者論」という特殊な言説に限定されるだけでなく、現代社会全体を

論じる場合にも考えねばならない。年長世代の社会認識の反映として若者イメージを見てきたが、そこに見いだせる状況や課題は同時に社会全体の状況や課題なのである。若年世代は決して年長世代から切り離された存在ではなく、現在、年長世代が彼らに要求する課題は、同時に年長世代自身にも要求されていると考えなくてはならない。その意味では「豊かな社会」としての社会状況に対する年長世代の認識を問い直すことが必要かもしれない。ここから先は実証研究によって厳密に検証する必要があるが、本稿の役割はここまでとしたい。

## 注

(1) エリクソンのライフサイクル論については、Erikson（1959=1973）を参照。
(2) このほかには情報メディア論からのアプローチがあるが、それについては守弘（1993）を参照。
(3) 情報化からみた「若者」イメージについては、新井（1993）に詳しい。
(4) 若者に限らない新しい人間像として、山崎正和は消費を媒介とする柔軟な関係に基づく「柔らかい個人主義」について論じている（山崎, 1984）。
(5)「分衆」と「少衆」を始めとするマーケティングにおける若者像については、植村（1993）を参照のこと。
(6) 「おたく」については多様な議論があるが、本稿の関連では宮台（1995）と大塚（2004）を参照。
(7) ここには山崎の「柔らかい個人主義」と同様の対人的状況をみることができる。
(8) 宮台真司はこのように都市化した社会環境での操作化し、細分化された若者のコミュニケーション状況の特徴を「ロールプレイ」や「島宇宙」として表現している（宮台, 1995）
(9) 「構造改革」における「自己責任」については、桜井哲夫（1998）を参照。
(10) 少年犯罪をめぐる言説については新井（2005）を、携帯電話の利用における現代人の特徴については、岡田・松田（2006）を参照。
(11) このほか自己愛的傾向なども指摘されるが、これは小此木が示した現代人の傾向を再記述したものと考えられる。
(12) 統計上の定義については、厚生労働省編『平成 17 年版労働経済白書』を参照。また、若者論としての「フリーター」と「ニート」に関しては、玄田・曲沼（2004）、および小杉（2005）を参照。
(13) 資産における格差の拡大については小澤（1985）を、消費スタイルにおける階層差については渡辺ほか（1984）を参照。
(14) 鈴木（2005）は現代的な主体と社会のあり方として、情報ネットワークにおける

データベースの参照を通して自己と社会の認識がおこなわれる状況を示している。

## 引用文献


浅野智彦, 2006, 「物語アイデンティティを超えて？」, 上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房: 77-101.

新井克弥, 1993, 「情報化と若者の描かれ方—80 年代後半以降の若者論を考察する」小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 169-203.

新井克弥, 2005, 「『少年凶悪犯罪言説』の社会的機能」, 『社会分析』32 号: 23-43.

新井克也・岩佐淳一・守弘仁志「虚構としての新人類論—実証データからの批判的検討」小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 204-230.

Erikson, E. H., 1959, *Identity and Life Cycle*, New York: International Universities Press (=1973,『自我同一性』小此木敬吾訳編, 誠信書房) .

藤岡和賀夫, 1984, 『さよなら, 大衆.』日本経済新聞社.

玄田有史・曲沼美恵, 2004,『ニート—フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎.

博報堂生活研究所, 1985, 『「分衆」の誕生』ＰＨＰ研究所.

速水敏彦, 2006,『他人を見下す若者たち』講談社.

本田由紀・内藤朝雄・後藤和智, 2006,『「ニート」って言うな！』光文社.

岩佐淳一, 1993, 「社会学的青年論の視角—1970 年代前半期における青年論の射程」小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 6-28 ページ

経済企画庁編, 1986, 『昭和 61 年版国民生活白書』大蔵省印刷局.

経済企画庁編, 1988, 『昭和 63 年版国民生活白書』大蔵省印刷局.

経済企画庁編, 1992, 『生活大国５ヵ年計画—地球社会との共存をめざして』大蔵省印刷局.

城戸秀之, 1993, 「消費記号論とは何だったのか」, 小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 86-109.

城戸秀之, 1995, 「『生活者』イメージにみる 90 年代的人間観—消費社会論再考のための覚え書き—」, 『経済学論集』43 号, 鹿児島大学経済学会: 77-88.

城戸秀之, 1996, 「消費の中の＜私＞探し」, 守弘仁志・岩佐淳一・大野哲夫・小谷敏・城戸秀之・早川洋行・新井克弥『情報化の中の＜私＞』, 福村出版: 116-137.

小杉礼子編, 2005, 『フリーターとニート』勁草書房.

小谷敏, 1993a, 「はじめに」, 小谷敏編『若者論を読む』世界思想社: i-iv.

小谷敏, 1993b, 「モラトリアム・若者・社会—エリクソンと青年論・若者論」, 小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 54-79.

厚生労働省編, 2005,『平成 17 年版労働経済白書』ぎょうせい。

栗原彬, 1981, 『やさしさのゆくえ＝現代青年論』筑摩書房.

正高信男, 2003, 『ケータイをもったサル』中央公論新社.
三浦展, 1999, 『「家族」と「幸福」の戦後史』講談社.
三浦展, 2004, 『ファスト風土化する日本』洋泉社.
三浦展, 2005,『下流社会』光文社.
三浦展, 2006「物語消費の喪失と, さまよう『自分らしさ』」, 上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房: 103-135.
守弘仁志, 1993, 「情報新人類論の考察」小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 142-168.
宮台真司, 1994,『制服少女たちの選択』講談社.
内閣府編, 2003, 『平成 15 年版国民生活白書』時事画報社.
大平健, 1990, 『豊かさの精神病理』岩波書店.
大平健, 1995, 『やさしさの精神病理』岩波書店.
岡田朋之・松田美佐編, 2006, 『ケータイ学入門』有斐閣.
岡田斗司夫, 1995,『ぼくたちの洗脳社会』朝日出版社（=1998, 文庫版）.
小此木啓吾, 1978, 『モラトリアム人間の時代』中央公論社（=1981, 文庫版）.
小此木啓吾, 1980, 『シゾイド人間』朝日出版社（=1984, 講談社）.
小此木啓吾, 1981, 『自己愛人間』朝日出版社（=1984, 講談社）.
小沢牧子・中島浩籌, 2004, 『心を商品化する社会』洋泉社.
小澤雅子, 1985,『新「階層消費」の時代』日本経済新聞社.
大塚英志, 2004,『おたくの精神史—1980 年代論』
桜井哲夫,1998,『＜自己責任＞とは何か』講談社.
鈴木謙介, 2005, 『カーニヴァル化する社会』講談社.
田中康夫, 1981, 『なんとなくクリスタル』河出書房.
植村崇弘, 1993, 「マーケティング時代の『若者論』と若者たち」小谷敏編『若者論を読む』, 世界思想社: 110-135.
上野千鶴子, 2006, 「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草　書房: 1-41.
矢幡　洋, 2004, 『自分で決められない人たち』中央公論新社.
山田昌弘, 1999,『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房.
山崎正和, 1984, 『柔らかい個人主義の誕生』中央公論社（=1987, 文庫版）.
渡辺和弘とタラコプロダクション, 1984, 『金魂巻』主婦の友社（=1988, 筑摩書房）.